

(5) 2009年(平成21年)7月22日(水曜日)



ふしぎを追って

324

— 研究室の扉を開く —

都市の緑

アメリカの作家O・ヘンリーが書いた短編小説「最後の一片」は教科書にも載っているのに、誰もが知って

いることでしょうか。

実は、こ

の小説を思い起こさせるような学術的な成果があるのです。それは、アメリカのペンシルバニア病院で実際に行われた実験なのですが、手術後の患者の経過を、レンガしか見えない病室の患者と緑の見える病室との患者とで比較したものです。その結果、緑の見える病室の患者の方が、明らかに早く病気が治ったので

す。

これは通称レンガ理論と呼ばれますが、この研究のように、植物に癒やしの効果があることは今まで指摘されてきたことであり、疲労回復などに

役立つ植物の効果が生理学的な実験などで確認されています。

建築研究所では、こうした緑の持つ効用について、都市整備の観点から定量的に把握する試みに取り組んでいます。その結果、主にアメニティ向上効果において大きな効果を確認されています。植物は建物や街の素材としては特殊なもので、生

きていることが、同じく生物の一員であるヒトに癒やしを与えるのでしよう。

世界を見渡すと、こうした緑の持つ機能に着目した街作りが、あちこちで進められています。その最たる例がシンガポールです。この街を訪れると分かるのですが、あれだけの大都市にもかかわらず実に緑が多いことに

驚かされます。シンガポールは金融や先端技術産業によって成り立つ都市国家なので、国際的に優秀な人材を確保する必要があります。緑は都市の魅力を増加させ、人材の定着や知的作業の効率を高めます。つまり、シンガポールでは国家戦略の一つとして都市緑化が進められているのです。かつては庭園都市(ガ

ーデンシティ)という合言葉のもとに街作りが進められてきたシンガポールですが、他の国の都市もそれに追随したことから、シンガポールが国際的に優位に立たなくなってきたことから、今では、これをさらに進

めて、庭園の中の都市(シティ・イン・ザ・ガーデン)というコンセプトのもとに緑化が進められているようです。

(建築研究所 住宅・都市研究グループ 上席 研究員 加藤真司)



まるで森の中にあるかのようなシンガポールの目抜き通り (シンガポール国立公園局提供)